木造建築をめぐる ②

レーモンドの大工

東京大学生産技術研究所　藤森研究室　担　当：速水 清孝

「つくる」という生産の肝心な部分を他者に預ける建築家にとって、つくり手の存在はとてつもなく大きい。例えばそれは、時には、技巧を凝らしたはずの意匠を、文字通り画餅と化した凡庸なものにしてしまうこともある一方で、時には、一作品はおろか、建築家の以後の作風にまで影響を及ぼす貴重なものとなることもある。

帝国ホテルの設計のためにフランク・ロイド・ライトとともに来日したアントニン・レーモンド。

ライトと袂を分かって日本に留まり、500に及ぶといわれる作品を残した彼の、建築家としての経歴の中にあるいくつかの表現上のターニング・ポイントには、そのいずれにも自邸がかかわっている。建築家にとって、自らが施主となる自邸は、最も制約のない形で思想を表現できる場で、それだけに転換期とするにはウッテツケだからだろう。

その最初は、世界でも異例に早い時期に実現された打放しコンクリート仕上げで知られる「霊南坂の自邸」（1924（大正13）年）で、これによってレーモンドはライトの影響から一気に脱する。次が「夏の家」（写真1）で、こちらはいわゆる「軽井沢式」の原点にして、部分的にはともかく、戦後の、一連の「レーモンド・スタイル」と呼ばれる木造作品の、まあ、萌芽といってよいものとなる。

露出した小屋組・丸太の梁・鋏状のトラスや板張りの室内を特徴とするレーモンドの木造は、設計にあたって彼が旨としたという単純性・経済性・直截性・率直性・自然性という5原則を考えれば、コンクリートよりも素直にその建築観を表現し得ていて、彼の作品において重要な位置にある。

こうしたスタイルが芽吹くその周辺を、年譜を追ってみていくと、「イタリア大使館別荘」（日光，1928（昭和3）年，写真2）・「トレッドソン別荘」（日光，1931（昭和6）年）・「夏の家」（軽井沢，1933（昭和8）年）・「聖ポール教会」（軽井沢，1935（昭和10）年，写真3）という、避暑地開発の歴史をなぞるかのような、日光から軽井沢へと向かう流れがある。

あるいはこれも影響しているのでは、と考えた。

つまり大工にも鍵ありとふんで施工者をみると、「夏の家」には赤坂藤吉[1]とある。赤坂藤吉―。奥日光・中宮祠で土木建築請負業を営んでおり、日光の建物を蒐集していくと、大正～昭和の戦前にかけて、例えば「中禅寺郵便局」（大正初,写真4）・「帝室林野局日光湯元山の家」（1940（昭和15）年）といったように、しばしばこの名前に出くわす。

すでに遺るものはほとんどないが、資料も交え手がけたものをみれば、「夏の家」の粗暴とすらいえる仕上げは、決して彼の限界を示すものではなく、むしろ建築家の意欲的な試みであったことがわかる。

実は、施工者不明とされる「イタリア大使館別荘」も、藤吉の仕事を継いだ藤寿さんの長女・ヒロコさ

写真１ 夏の家（移築後、外観からかつての躍動感は失われた）

写真2　イタリア大使館別荘

写真3　聖ポール教会

写真4　中禅寺郵便局（日光市所野に移築された際のもの）

んは、「藤吉さんではないでしょうか？　この辺りには当時、藤吉さんしかいなかったようですし、修繕もずっとウチが請けていたのですし……」という。

証拠としては少々弱いが、これに続き、「夏の家」を経て、さらに「聖ポール教会」が同じ手になるようであれば、レーモンドの転換期にそれを支えた大工・赤坂がいたとなって、話はごく簡単になる。実際、「聖ポール教会」も彼の作とみる向きもあったのだけれど、数年前、ひょんなことからそれが覆って、中村兵二[2]という大工がやおら浮かび上がった[3]。

その中村とレーモンドの縁がどのように始まったかについて、娘婿の兵一さんの奥さん、つまり兵二の長女・紀子さんが、「中宮祠の二荒山神社で知り合った赤坂さんのご紹介で」と、先年故人となられたご本人に代わって教えてくれた。

では赤坂とレーモンドは？

やはり二荒山神社ではなかったかと思う。ごく小さな湖畔の町で、ツテのない者が腕のいい大工を求めるとなれば、それがまず容易な手だろうからだ。

おそらくは、奥日光での設計を携えたレーモンドが、二荒山で出会った出入りの赤坂に、まず「大使館別荘」を委ね、続いて軽井沢に伴って「夏の家」を実現した。そして、同じ二荒山で赤坂と出会った中村を、多忙となった赤坂の代わりに据えて「聖ポール教会」をつくった、ということになるのだろう。

その後の赤坂と中村はどうなったか？

ともにレーモンドとの縁はこれだけに終わらなかったが、赤坂の方は、中宮祠では知られた大工稼業を早くも戦時中には縮小、他へと重心を移し、戦後は林業が中心となっていく。一方の中村は日光の隣の今市で工務店を営み、引退するまで地元では名の知れた大工として、主に住宅の場で活躍した。

また、「自分では設計はほとんどしませんでした。自分の家、この家ですね。これは自分で設計しましたが」という。もしや独立してすぐにレーモンドという超級の建築家と仕事をしたことがもとで、以後、設計は建築家に任せることにしたのでは？とも思うが、今となっては確認のしようがない。

ところで、赤坂も中村も、経歴からうかがう限り堂宮もできたのだろうから不思議はないのだが、鉄道の発達が背後にあったとはいえ、日光の大工が軽井沢を訪れるというのは、活動範囲の狭い家大工のものではなく、明らかに宮大工のそれである。

そしてこの時期、彼らのような堂宮にふれたことのある大工が、のちに家作を中心に活躍する姿をしばしば目にするのは、必ずしも社寺が良質な修業の場となっていたことばかりではなかろう。社寺は、特殊なものを除けばそうそう建て替えるものではないし、明治末の神社合祀を機に無格の社が目に見えて減ることも遠因となったに違いない。

最後に紀子さんが気になることを教えてくれた。

「そういえば戦後、花屋台を出入りの職人さんたちとつくっていたのを覚えています」

屋台といっても、お祭りの際に引く山車に似たモノのこと。この地方で社寺をやったことのある大工の足跡を追うと、なぜか昭和に入る頃からこの屋台や神輿が目立つようになる。腕に覚えのある大工という木工の職人が、社寺という活躍の場を奪われていく中で、建築とは違うこうした場所にささやかな活路を見出したということなのだろうか。

それはともかく、建築家レーモンドが日本の大工を称揚していたのを思うとき、彼のもとに集まった優れた設計のスタッフとのばかりでなく、大工たちとの幸せな出会いが、彼の新たな展開の陰にあったこともまた忘れるわけにはいかないのである。

1　1892（明治25）年頃ー1967（昭和42）年頃。
2　1913（大正2）ー2001（平成13）年。
3　『JA volume 33 ANTONIN RAYMOND』新建築社, 1999, Spring.
なおこの経緯については、中島松樹「聖パウロ教会の棟梁　中村兵二氏」『軽井沢ナショナルトラストだより』No.17, 2003.
参考文献：三沢浩『A・レーモンドの住宅物語』建築資料研究社, 1999.